

職員研修計画

研修主題 **「変化の時代を生き抜く思考力・判断力・表現力の育成」**

～ICTの活用と国際理解を通して～

1 主題設定の理由

(1) 児童生徒の実態

① ICTという視点から

昨年度は、小4以上には iPad が導入され、様々な場面で実践された。児童生徒は、自分でスライドを作り発表する、ドライブ上で情報を共有するなど、情報機器の活用が身についてきた。GoogleClassroom や共有ドライブの使用方法にも習熟が見られる。特に、新しく導入されたアプリに関しては、児童生徒たちの方がすぐに使いこなし、教師が教えてもらうような場面も見られるほどである。基本的な活用方法が身についた今、授業や生活の中でどのように ICT を位置づけ、応用を利かせていくかを模索し続けていくことは、日々進化する ICT 関連やそれに順応する児童生徒の様子を鑑みて、とても重要なことだと考える。

② 国際理解という視点から

ロンドン日本人学校の目指す児童生徒の姿に、「国際社会を生きぬく力」を身につけた生徒の姿とある。しかし、コロナ禍の影響で一昨年度、昨年度と現地校交流が通常通りに出来ていなかったことも踏まえ、実態はどうであろうか。イギリスで生活しながらも、イギリスの伝統文化や思想に対する知識や理解を深める機会がないままであったり、積極的にイギリス社会の中に飛び込めなかったりするのが事実であろう。当然、日本の教育を行うことが第一であるが、その目的も諸外国との違いを比較・検討していくことでさらに日本の文化や慣習などをより深く理解できるはずである。イギリスも日本も、よいところや悪いところがそれぞれにあり、「おもしろい！大好きだ！もっと追究したい！」という思いを育ていけるとよい。それは、児童生徒だけでなく、教員にも言えることである。今年度は、貴重な国際理解の場である現地校交流をはじめとする外部とのつながりを重視し、児童生徒も教員も国際理解を深めていくことが必要である。

(2) 社会的背景

① ICTの視点から

急速に進展する ICT 化社会（情報化社会）、グローバル社会をたくましく豊かに生きていくためには、自ら考え、判断し、他者と共同しながら困難を乗り越え、価値の創造に挑む力が必要になる。児童生徒が成人して社会の一翼を担う頃には、社会や職業のあり方そのものが大きく変化していることは間違いない。そのような変化の時代において未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力」を身につけ、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力」が求められている。また実際の社会の中で生きて働くための知識・技能として、ICT を活用して他者と繋がり学ぶ姿勢、ICT を利用して自らを表現する技能を高めることが重要である。

② 国際理解の視点から

また、ICT 技術の革新はグローバル化を急速に速め、世界が一体化している現状は今後ますます避けられるはずもない。国際化という捉えも、国家と国家という単位ではなく、企業や個人の単位で各々考え、国境を越えて諸課題に取り組むという意味合いに変化している。ユネスコでも 2015 年から持続可能な社会づくりを目指す 17 の目標（SDGs）が打ち出され、日本でも注目されている。つまり、各個人に国境を越えて諸課題に取り組んでいく姿勢が求められており、「広い視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく態度」はこれからの社会を生き抜くための極めて重要な考え方であり、新しいスタンダードともいえる。このような社会情勢を鑑みて、本研究が目指す「思考力・判断力・表現力の育成」は、このグローバルスタンダードの捉えの上に成り立たせる必要があると考える。

(3) 目指す児童生徒像

ICT を正しく活用していくことと、国際理解をさらに深めていくことを大きな柱として、情報社会、グローバル社会の時代を、そして今後の予測が難しい社会の変化を賢くたくましく生き抜くための「思考力・判断力・表現力」をもった児童生徒の育成を目指す。

2 本年度の研修の目的

(1) 研修の目的

『思考力・判断力・表現力の育成に有効な ICT 技術の発掘・試行・検証』（ICT）

『思考力・判断力・表現力を支える他者との違いを認める態度の育成』（国際理解）

(2) 目標設定の理由

① ICT 活用について

現在ロンドン日本人学校の ICT の活用の実態は、Google ドライブ、GoogleClassroom、YouTube 配信などを中心に運用されている。授業内でも PC やタブレットを利用して教材開発したり、児童生徒にまとめさせたりして様々な場面で積極的に活用している。しかし、教員の習熟よりもはるかに速いスピードで、次々と新しいソフトウェアが登場している。この日進月歩の技術革新に対しては、これまでの技術や方法に留まることなく、常に新しいものを更新していくという態度は重要である。また、個々の教員の経験や努力だけに頼るのではなく、教員チームとして高くアンテナを張り、知識や経験を共有していく必要がある。したがって、本年度も引き続き ICT 技術の発掘・試行・検証を続けていく。

② ロンドン日本人学校の国際理解教育

イギリスの教育の柱にある OFSTED や PSHE などは、日本の教育にはない領域である。それは様々な人種が入り混じっている特性、世界でも最も速く人権教育を取り入れた国ならではのものかもしれない。しかし、それはこの先の未来のスタンダードであろう。世界でもトップクラスの人権教育や多文化共生の文化を肌で感じることができることは、日本では簡単にはできないことである。そして、他者とのちがいを認め、共生し、尊重する態度は、グローバル社会における「思考力・判断力・表現力」の根幹をなすものであると考える。

ロンドンに暮らすという地理的な利点を生かし、国際教育理解を深めて児童生徒に還元していくことは非常に大切なことであり、それはロンドン日本人学校でしか経験として学べないことである。コロナ禍による失われた 2 年間の現地校交流に重きを置き、国際理解教育としての位置づけを明確化し、意識づけ、教員同士で共有することで、児童生徒のみならず教員も国際理解を深めていきたい。

3 研修の具体的構想

(1) 昨年度は広く ICT を活用した実践を各個人で行い、そのアイデアを皆で共有した。様々なアイデアを共有する場合は、職員アンケートから見ても参考になったようである。ICT 活用に関して人により得手不得手があることや派遣の教員は 2～3 年で入れ替わることを考えると、やはり、ICT の実践アイデアは収集し、共有したい。また、前述した通り、ICT の技術革新は日々進歩しているので、昨年度の蓄積に加えて、さらに新しいアイデアや効果的な使い方を模索していく。

(2) この 2 年間はコロナの影響を受けて例年通りの現地校交流が実施されなかった。「例年の」現地校交流を知る派遣の教員もごく少数である。ロンドン日本人学校の大きな意義である「国際社会を生き抜く生徒」を目指すうえで、今の逆境を好機ととらえ、本年度は、生徒だけではなく、我々教員にとっても実りある現地校交流としたい。生徒に国際理解を深めさせるためには、教員自身も深く知る必要がある。生徒を見守りサポートすることに加え、教員自身も貴重な現地校交流を通して、現地の教育を積極的に学び、吸収し、広く教員間で情報を共有することで、国際理解を深めようという趣旨である。

4 研修体制

(1) ICT 研修に関して

① ICT を活用した授業実践とレポート報告

- ・ 個別研修として、1年間を通じ、それぞれの教員が積極的に ICT 技術を使用した授業を行う。小4以上では、iPad を使用した授業であることが好ましい。
- ・ 授業を行う際には、児童生徒の「思考力・判断力・表現力」の伸長に主眼をおくよう意識し、授業者としてどのような手立てを行い、どのような手応えがあったかについて記録する。
- ・ 授業を行った上での授業者としての所感をレポートもしくは、他の方法（動画等）で記録し、教員間で共有する。
- ・ レポートに学期の実践をまとめ、レポート報告研修を夏季研修で行う。レポートの提出は、共有フォルダ内に PDF やその他の形式で保管し、職員間で閲覧できるようにする。

② 授業を見にいこう WEEK の設定【9月12日（月）～9月16日（金）】

- ・ 授業のない時間を利用して、ICT 機器を利用した他の教員の授業を見に行く。
- ・ 授業の感想をスプレッドシートに書いて授業者に還元し、互いの授業力の向上を図る。
ICT 技術は日進月歩の分野であり、今もてはやされている技術が数ヶ月後には陳腐化しているということも少なくない。そのため、形式にこだわるあまり小回りの利かない研修体制になるよりも、よりスピーディーでアクティブな形式での「生きた研修」を目指したいと考えている。研修の方法等についても現実にそぐわない部分があれば、または状況が変化した場合は適宜修正し、改良する意図をもっている。

(2) 国際理解教育に関して

① 各学年の現地校交流の様子を共有

- ・ 現地校ではどのような授業が行われているのか、現地の子どもの様子はどのようなものかなど様々な視点をもって現地校交流を行い、記録する。
- ・ 12月後半の職員研修で、現地校訪問レポートを元に全職員で共有し、学び合う。
- ・ 授業や生活の中で生かしていく

② 英会話（外国語 B）の授業への参加

- ・ 空き時間を利用して、英会話/外国語 B の授業に参加する。
- ・ PSHE に関わることやイギリスの教育、文化、風習などを児童生徒とともに学ぶ。

③ 教員による現地校視察

- ・ 研究部を中心に、現地校の授業の様子や子どもの様子、文化、取り組み等の視察を行う。
- ・ 現地校で学んだことをまとめ、12月後半の職員研修で報告し、全職員と共有する。

④ 「JOES Davos Next プロジェクト」への参加

- ・ 2022年9月6日（火）・・・オンライン講演（山中伸弥教授）
- ・ 2022年9月～11月・・・オンライン group work session（3回程度）
- ・ 2022年12月18日（日）・・・NETWORKING SESSION（地域別でのオンライン交流会）
- ・ 他の日本人学校の児童生徒との交流を図ることができる。これをきっかけに日本人学校とのつながりを持ち、今後の国際理解教育に役立てていく。

上記の方針をもとに「広い視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく態度」を養うための素地を作り、年間を通して授業や日々の生活にどのように生かしていくか検討し研鑽を積んでいく。